

関西学院大学 研究成果報告

2021年5月30日

関西学院大学 学長殿

所属： 文学部
職名： 教授
氏名： 米虫正巳

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	現代フランス哲学に関する日仏共同研究
研究実施場所	自宅
研究期間	2020年4月1日 ～ 2021年3月31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

特別研究期間の開始前に急速に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、フランスの研究者との対面による共同研究を行なうことが不可能となり、また発表を予定していたあらゆる学会が中止もしくは延期となったため、メールやZoomでのやり取りを除けば単独で研究を行なうことを強いられ、当初の計画を大幅に見直さざるを得なかった。そもそも哲学を含めた人文諸学の研究は近視眼的な成果を求められるべきものではなく、短期的に成果を上げることを目指すよりも、今後の10-15年を見据えた長期的な研究のための準備と基礎の構築を行なうように研究計画を変更した。以下はまだ途上であるが、その研究計画に従って遂行された研究成果の一部である。

(1) シモンドンの哲学の意義と限界の画定。

20世紀フランスの哲学者ジルベール・シモンドンは、近年日本でもフランスでも（再）評価の気運が高まり、その哲学の意義や可能性が様々に検討されつつある。本研究では、そのようなシモンドン哲学の体系に対して、個々の哲学体系にはそれに固有の内的な整合性が存在する—「〔哲学体系の〕諸構造の発見は、どんな哲学の研究にとっても肝要である」と主張するフランスの哲学史家マルシアル・ゲルーが想定していたように—だけでなく、そうした整合性

をはみ出してしまうものが必然的に内在しているという観点から、体系の孕む齟齬の解消を通じたポテンシャルの解放・増幅・拡張という仕方での、シモンドン哲学の限界の先に進むような研究の方向性を探った。次の合評会で部分的に発表。米虫正巳「ポテンシャルを解放した先に—シモンドンの読解をめぐる」、宇佐美達朗著『シモンドン哲学研究』（法政大学出版局、2021年）合評会、大阪大学大学院人間科学研究科共生学系未来共生学講座共生の人間学、2021年5月22日。

(2) ロトマンの数理哲学の現代哲学における定位。

第二次世界対戦前にその数理哲学を打ち立てたフランスの哲学者アルベール・ロトマンは、長らくその存在が忘れられていたものの、2006年にその業績の大部分を収録した著作集が刊行されたことにより近年再評価が進みつつある。しかし、そもそもロトマンの数理哲学の重要性は今から50年以上も前にドゥルーズが的確に指摘していたことであり、ドゥルーズ以降もバディウなどのような現代フランスの哲学者に影響を及ぼしている。そこで本研究では、そのようなロトマンの数理哲学の現代性がいかなる点に存するのかを、ドゥルーズやバディウの哲学で重要視されるポイントを取り出すことによって明らかにすることを試みた。次のロトマンの著作の翻訳に付した解説という形で公表予定。米虫正巳「現代フランス哲学の先駆者アルベール・ロトマン」、アルベール・ロトマン『数理哲学論集』所収、近藤・中村・原田・米虫訳、月曜社、2021年6月刊行予定。

(3) アンリの「生の現象学」を起点とした内在主義の解明。

20世紀のフランス現象学を代表するミシェル・アンリの「生の現象学」は、デリダの見立てによればドゥルーズの哲学と共に「内在主義」とであるとされる。本研究ではこの内在主義という観点からアンリの現象学を検討した。具体的には、アンリに影響を受けたフランソワ・ラリュエルの「非哲学」との関係でアンリの内在主義の特色を明らかにすると共に、アンリの「内在」に還元されないラリュエルの「内在」としての〈一者〉と対比させることで、アンリの内在に含まれる難点を指摘した。また併せてこの難点がラリュエルの〈一者〉にもそのまま跳ね返ってくることから、その「非哲学」にも同様の困難が潜むことを明らかにし、そこからさらにもう一つの内在主義であるドゥルーズ哲学における「内在」概念を踏まえつつ、「内在主義」の可能性と意義の解明を目論んだ。一部は次の学会で発表し、また別の一部は次の論文として刊行予定。米虫正巳「生の現象学と非哲学—アンリとラリュエルの交差と分岐」、日本ミシェル・アンリ哲学会第12回大会、2020年12月19日、米虫正巳「アンリとドゥルーズ—内在主義は一つなのか」、日本ミシェル・アンリ哲学会編『ミシェル・アンリ読本』所収、法政大学出版局、2022年刊行予定。

(4) その他として、以下のテーマに関して集中的に研究を行なった。今後10-15年を見据えた長期的な研究の基礎となるものであり、その成果は現段階ではまだ部分的なものにすぎないが、いずれ論文や著書として刊行する予定である。a) 哲学における直観の主体と対象とは何かという問題の究明、b) 20世紀後半から現在に至るフランス哲学史でのニーチェの位置づけについての考察、c) フランス・エピステモロジーと現象学が交わる地点での概念と意識の関係の分析、d) 人と人の関わりや人と物の関わりを取り巻いて包摂する場の特殊性の追求、e) 生の基底をなす感情と情感性の本質と力動性についての研究、f) 物にも行為にも還元されない出来事の論理の探究。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。